教員から学生への推薦図書

大学図書館にある本から学生のみなさんに
読んでほしい一冊を紹介していただきました。
普段あまり本を読まない学生さんも
思わぬ良い本との出逢いになるかもしれません。

経済学の冒険 :ブックレビュー&ガイド100

塚本恭章 著
（読書人 2023）

豊図開架 331:Ts54
名図開架 331:Ts54

塚本 恭章
経済学部

本書は、著者が主に一般紙に寄稿してきた経済学関係の書物60冊のブックレビューに、40冊のブックガイド、ゼミや卒論、書評、恩師らとの学問的交流についてのエッセイなどをくわえて編んだ作品です。書評した本の著者からのリアクションも所収しています。650頁と大部の本ですが、ぜひ愛知大学の学生諸君は手に取って読んでほしいです。

経済学の書評集は珍しいとのことです。書評は書物への「記録」ですが、その記録を「100冊」に及んで掲載すると、そこから浮かび上がってくる景色はとてもカラフルです。本書では「市場と貨幣」、「資本主義と社会主義」、「経済思想と経済学説」、「人間社会と自伝・評伝」というトピックスにまとめており、多様な経済学者が「対話」しています。率直な「対話」を可能にすることこそが学問の発展に欠かせず、経済・経済学に対して異なる思考をもつことの重要性が尊重されているのです。こうした「記録」が、たしかな「記憶」として定着するとき、本書のもつ魅力はさらに増すのではないでしょうか。

教養としてのジェンダーと平和Ⅱ

風間孝・今野泰三 編著
（法律文化社 2022）

名図開架 367.2:Ka99:2

加治 宏基
現代中国学部

多くの人たちが平和を求め、そして格差のない社会を求めています。岸田総理やバイデン大統領に限らず、習近平国家主席やプーチン大統領、さらに金正恩総書記も異口同音に、そんな理想を語ります。

国内外の情勢はその言葉と裏腹ですが、世界のリーダーたちが詭弁を弄している訳でなく、彼ら彼女らが本気で実現を目指す「平和」「平等」「公正」の中身が、それぞれに異なっているのです。その現実をいかに捉え、改善にむけて私たちはなにができるのか。本書は「教育」「記憶」「労働・消費」など15のテーマの下、ジェンダー論と平和研究の2節から構成されます。私たちの生活空間が世界とつながっているという皮膚感覚に満ちた本書は、世界を変える主体としての一歩を、みなさん読者に提示してくれるでしょう。

日常の読書学 ジョゼフ・コンラッド『闇の奥』を読む

中井亜佐子 著
（小鳥遊書房 2023）

名図開架 933:C86

吉本 篤子
国際コミュニケーション学部

本書は、映画「地獄の黙示録」の原作としても知られるコンラッドの小説『闇の奥』がこれまでどのように解釈、批評されてきたかを紹介しながら、私たちの本の読み方を考察する一冊です。本のテクストに隠れた真の意味を探ってきまじめに読むのがいいのか、著者の意図や背景から離れてテクストそのものを読み楽しむのがいいのか、自分の経験や生きている社会から離れて独立したテクストを読むことなどできるのか？……これまで論じられてきた文学理論・批評理論を説明して『闇の奥』がどう解釈されてきたかを論じ、批評家ではない「ふつうの読者」である私たちにとって読書とは何なのかを考えさせてくれます。

3つの視点で会社がわかる「有報」の読み方（第3版）

EY新日本有限責任監査法人 編
（中央経済社 2022）

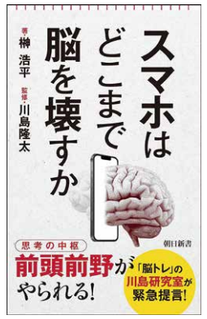
名図開架 336.83:Sh64

粥川 和枝
経営学部

学生のみなさんは、「有報」すなわち「有価証券報告書」をご存じでしょうか。

「有価証券報告書」は、企業が投資家向けに自らの情報を開示するもので、企業の業績・ビジネスモデル・強みや弱みといった詳しい情報を効率的に知ることができます。就職活動の際に行う企業研究にも活用したい「情報の宝庫」です。

図書「有報」の読み方では、この「有価証券報告書」を読むポイントを解説するために、大局的・ストーリー別・項目別という3つの視点から整理をしています。学生のみなさんにとっては、最後の項目別に読むという所は内容が少し難しいので、「有価証券報告書」を大局的に読む、ストーリーから読むという所を中心にまず勉強してほしいと思います。



スマホはどこまで脳を壊すか

榊浩平 著、川島隆太 監修
（朝日新聞出版 2023）

名図開架 491.371:Sa31

西津 政信
法学部

スマホは子どもたちの学力を破壊しており、その使用時間が長いほど学力（学校の成績）は低下するが、減らせば逆に向上することが、小中学生を対象とした最近の調査で確認されたことが、本書タイトルで示唆されている最重要エビデンスである。その長時間使用は、人間の知的活動に必要な認知機能を支える大脳前頭前野の発達を阻害し、記憶障害、うつ病などの「デジタル認知症」の原因にもなっていることが既往研究結果により提示され、さらにデジタル機器への依存を改善させる「デジタル・デトックス」の方法論も紹介されている。

関連書として、近時世界的なベストセラーとなった『スマホ脳』のほか、『最強脳』、『ストレス脳』（いずれもアンデシュ・ハンセン著、新潮新書）などもある。

戦場の精神史 武士道という幻影

佐伯真一 著
（NHKブックス 2004）

名図開架 156:Sa14

緒方 賢一
文学部

とにかく驚きの連続でページをめくる手が止まらない。著者は「日本の武士たちは正々堂々と戦うことを旨とし、だまし討ちを否定していた」という我々の認識が単なる幻想に過ぎないことを厖大な文献を駆使して明らかにしていく。

源平合戦から戦国時代に至るまでの戦さはだまし討ちでも何でもありで、とにもかくにも勝てばよいという価値観に貫かれており、フェアプレイ精神などかけらもなかったという。

「武士道と云うは死ぬことと見つけたり」で有名な『葉隠』も、江戸時代はほとんど読まれず、明治にわき起こった理念的「武士道」賛美の時流の中でようやく「発見」されるのである。

テロルの決算

沢木耕太郎 著
（文藝春秋 2004）

豊図開架 916:Sa94:7
名図開架 916:Sa94:7

斉藤 徹史
地域政策学部

最近の首相を狙ったテロ事件発生の報に接し、本書を思い出した読者もいたことだろう。昭和35年10月、17歳の右翼の少年が日本社会党の浅沼稲次郎委員長を襲撃して殺害した事件を取り上げた本書は、事件までのそれぞれの時間の積み重ねを描写し、襲撃の瞬間に見事に交錯させた。この事件は、国民に人気のあった政治家が大衆の面前で刺殺されたこと、未成年者が犯人であったこと、そして犯人が悲劇的な結末を迎えたことで、社会に大きな衝撃を与えた。ノンフィクションの旗手ともいわれる筆者の代表作『深夜特急』を読んだことのある学生もいるだろう。本作もまたノンフィクションの「傑作」と評される。すべての学生に一読を勧めたい。